

第1回4人制車椅子ハンドボール世界選手権大会に参加して

2022年9月22日～25日にかけて、エジプト・カイロにて開催された「第1回4人制車椅子ハンドボール世界選手権大会」に、車椅子ハンドボールの国際審判員として参加させていただきました。

世界で初めて行われた大会に、日本から唯一ノミネートされたことは非常に恐縮かつ光栄なことでした。また、この派遣を通じて、車椅子ハンドボールの今後の発展に向け、さらに尽力していきたいと決意を改める気持ちになりました。下記のとおり、詳細についてご報告させていただきます。

1. 経緯

車椅子ハンドボールはこれまでも世界各地で行われ、日本でも9月18日～19日に第20回目となる「日本車椅子ハンドボール競技大会」が開催されましたが、それぞれの国・地域で異なるルールを採用してきたため、国際大会を開催することができませんでした。そのため、車椅子ハンドボールは他の車椅子スポーツ競技から遅れを取っており、パラリンピック種目にもなっていません。国際ハンドボール連盟（以下「IHF」）では、2019年10月に初めてとなるワーキンググループのミーティングを開き、パラリンピック種目採用の条件となる「世界選手権大会の開催」を実現すべく活動してきました。並行して、国際審判員を採用するための認定講習を2022年の年明けからウェビナーにて行い、日本からは中島昭博氏、宮本祐輔氏、そして柏葉公平の3名が受講し合格。今回、その3名の中から柏葉がIHFからノミネートされ、車椅子ハンドボール国際審判員として、世界選手権大会に日本人として初めて参加することになりました。

2. レフェリーコースの概要

1日目：9月19日(月)

時間	内容
9:00～12:30	ウェルカムミーティング、車椅子ハンドボールについての研修、大会運営並びに業務内容の流れについて
13:00～14:30	昼食、スポンサー支給品の受け取り(ウェア、シューズ等)
15:00～16:30	Rule & Regulation Test (競技規則と大会運営に関するテスト)
17:15～	大会会場へ移動
18:00～	エジプト代表チームのテストマッチ(紅白戦)レフェリー
20:30～	ホテルへ移動、夕食

- ・ ウェルカムミーティングでは、タボルスキー氏から「私たちは車椅子ハンドボールの新たな歴史を作っている」という言葉があり、みんな高揚感と緊張感に包まれました。
- ・ IHFとしては、今後4人制の方を軸に進めていきたいとの考えが伺えました。選手を集めやすいこと、競技用車椅子の運搬や選手の移動の費用が安くなることなどが理由だそうです。できるだけ多くの国と地域から大会への参加者を集めたいという狙いが伺えました。
- ・ 「現在のルールブックは『産まれたばかりの赤ちゃん』であり、今回の大会はルールの解釈が大事になる。今大会を経て、さらに協議し、ルールブックを育てていきたい」とのコメントがありました。実際に、レフェリーたちで活発なディスカッションが行われ、いろいろ意見交換できたことが非常に良かったです。
- ・ ルールテストは、テストが印刷されたものが渡され、レギュレーションテストも含めて45分間で行われました。一生懸命事前に勉強していたおかげで、一番早く試験を終えることができました。
- ・ マイクロバスで会場へ移動し、大会が行われるアリーナを見学しました。エジプト代表チームの練習が行われており、続いて紅白戦が行われました。私たち審判団は、その場で研修講師のプレト氏から選ばれて、1セット10分ずつ吹かさせていただきました。私はハンガリーのレフェリーとペアを組みました(銘苅淳選手の試合を吹いたことがあると言っていました)。動きや位置取りなどがキビキビしていて良かった、良い審判だったと評価をいただきました。鍛えてくれた岩手県審判の先輩方に感謝です。

2日目：9月20日(火)

時間	内容
9:00~12:30	講義(競技時間についての確認、ルールの確認、主にブロックとドリブル)、ビデオテスト
13:00~14:30	昼食
15:00~	講義(スペクタクルゴール、TDの任務について)
17:30~	大会会場へ移動
18:30~	テストマッチ(エジプト vs インド) ※リハーサルを兼ねる
20:00~	講義(クラス分けについて)
21:00~	ホテルへ移動、夕食

- ・ 昨夜のテストマッチで、ドリブルについての解釈が曖昧だったため、再度確認を行いました。ドリブルは、常に片手で継続して行い、途中で車椅子を両手で漕ぐためにボールとのコンタクトが途切れた場合はイリーガルドリブルの判定になることが確認されました。また、ボールで車椅子の車輪に触れる(擦る)ことで減速する行為は、相手のフリースローになることなども確認しました。これらは競技規則に明記されていないので、あくまで解釈ベースで進めることになりました。
- ・ 映像を観ながら行うビデオテストが行われました。映像でははっきり見えない箇所もあり、非常に難しかったです。特に、プレー中に固定用のストラップが緩む現象や、リフティング(車椅子から腰が浮くプレー)に目が行かないことがありました。テスト後に再度映像を観ながら、審判団でディスカッションを行いました。
- ・ スペクタクルゴールについては、速攻の場面以外でも起こることが昨日のテストマッチでも分かり、その判定基準などについても議論が行われました。
- ・ 夕方からのテストマッチは、大会と同様に、役員・選手の入場、国歌演奏なども含めて行われました。昨日の紅白戦で吹笛しなかったレフェリーが担当しましたが、やはりまだ判定にばらつきがある感じがしました。レフェリーも選手たちも、大会を通じて徐々に慣れていくしかないような気がしました。テストマッチではタイブレークを実際にやることになり、リハーサルとしてはとても良い試合になったと思います。
- ・ 試合後にクラス分けの講義を受けましたが、今大会に参加しているクラシファイアは3名ともオランダ人とのことでした。オランダで何かあったら全員参加できないことになるので、「もっと他の国からもクラシファイアが出てくれることを期待する」とのコメントがありました。車椅子バスケットボールとの協力・連携が求められることも強調されていました。

3日目：9月21日(水)

時間	内容
9:00~12:30	ルールについてのオープンディスカッション、それぞれのハンドボール経験やそれぞれの地域の車椅子ハンドボールについての情報交換
13:00~15:30	昼食・休憩
16:00~	会場へ移動
17:00~	フィジカルテスト(シャトルラン)
18:00~	ホテルへ移動
20:30~	テクニカルミーティング ※レフェリーは参加せず

- ・ ルールについてのオープンディスカッションでは、女性や低いクラス(クラス1~2)のプレーヤーの得点を2点にしてはどうか、膝の上にボールを載せることを禁止してはどうか、など様々な提案がなされました。今後、IHFの中でも協議を進めていくとのことでした。
- ・ レフェリーコースの締めくくりとして、レフェリー及びTDのそれぞれのハンドボール経験、国や地域での車椅子ハンドボールについての情報交換などを行いました。私は、日本では全国大会が今年で20回目を迎えること、日本では独自のルールを採用していること、しかしプレーしているのは健常者が多いことなどを報告しました。全国大会がない地域、日本のように独自のルールを採用している地域、車椅子ハンドボールが非常に盛んで、男女別に大会を行おうとしている地域など、様々でした。これについて、「世界的な車椅子ハンドボールのファミリーになるためには、現在独自のルールで競技している国や地域も、国際ルールに合わせて変わっていかねばならない」ということが強調されていました。
- ・ シャトルランテストは、通常のIHF国際審判員が求められるレベル(9.5)を目標としてトレーニングしてきましたが、レベル9.1で終了となりました。車椅子ハンドボールの審判でシャトルランは必要か?とい

う議論もありましたが、IHF が通常行っているテストに則って実施したようです。日本と音が違い、ペース配分が難しく、目標に届かず非常に悔しかったです。

3. 大会について

1 日目： 9 月 22 日(木)

時間	内容
7:45～	会場へ移動
10:00～	ブラジル v スロベニア(リザーブ) / チリ v オランダ
12:00～	エジプト v インド (ハンガリー人レフェリーと担当)
13:00～	昼食、休憩
16:30～	インド v チリ / オランダ v ブラジル (リザーブ)
18:30～	スロベニア v エジプト
21:00	ホテルに帰着、夕食

- ・ 審判の担当割については、前日夜に連絡がありました。担当レフェリーと同じ色のレフェリーシャツを着て、オフィシャル席の後方に待機するリザーブレフェリーという役割もありました。また、セレモニーの際には、必ずジップジャケットを着用することが求められました。なお、予選リーグのユニフォームカラーについては、レフェリーシャツの色も含めて全てテクニカルミーティングで決定され、カラーシートが前日夜に届きましたので、それに合わせて準備することになりました。
- ・ 今回、ポルトガルとパキスタンから 2 名ずつレフェリーが参加していましたが、ペアになることはなく、それぞれ別の国出身のレフェリーが即席ペアでレフェリングしました。ヘッドセットでコミュニケーションを取りながら吹笛しましたが、やはりここでも高い英語力とコミュニケーション能力が必要だと感じました。この日はハンガリー人レフェリーとペアを組みましたが、互いに信頼関係が出来ていたので、落ち着いて吹笛することができ、レフェリングについては概ね好評価だったと思います。
- ・ エジプト戦は、ホームチームの夜の試合だったこともあり、多数の観客が駆けつけて、世界選手権らしい盛り上がりを見せました。
- ・ 余談ですが、昼食後の休憩時間に、ボランティアで参加している小中学生がハンドボールで遊んでいました。子どもたちがハンドボールをしている姿を見て、つい、いつも少年団で教えているように子どもたちに交じってしまいました。「日本の少年団でコーチをしているんだよ」と言ったら、「スピンスhootを教えて！」と、ちょっとした講習会みたいになりました。ハンドボールが好きな気持ちは、どの国でも同じなんだなと感激すると共に、日本以外で子どもたちにハンドボールを教えるのも悪くないなと思いました。

2 日目： 9 月 23 日(金)

時間	内容
8:15～	会場へ移動
10:00～	オランダ v スロベニア (リザーブ) / ブラジル v インド
12:00～	チリ v エジプト (パキスタン人レフェリー①と担当)
13:00～	昼食、休憩
16:30～	インド v オランダ / チリ v スロベニア(パキスタン人レフェリー②と担当)
18:30～	エジプト v ブラジル (リザーブ)
20:30～	ホテルに帰着、夕食

- ・ 試合を通して感じたことは、全てのプレーヤーが元々ハンドボールをやっていた訳ではなく、ルールについての理解がまだ浅いということです。これは「国際ルールになったから」ということではなく、世界選手権といえども、車椅子ハンドボールの経験が選手によってバラバラだということです。フリースローのポイント修正や、プレー再開の笛など、何度も口頭での指示が必要でした。また、今回は試合時間が短いため、できるだけ 2 回目の退場(=失格)を避けるため、口頭での注意を多くしましたが、英語が話せない選手たちも多く、ジェスチャーや表情で伝えることに苦心しました。今後、国際試合を重ねることによって、この点が徐々に改善されていくことを期待します。
- ・ プレーについて感じたことは、車椅子ハンドボールは、通常のインドアハンドボールと競技の特性が異なるということです。例えば、スロベニアは、インドアハンドボールのプレーや戦術を車椅子ハンドボールでやろうとしていて、それがうまく機能していないように感じました。一方で、インドは非常にシンプル

ですが、車椅子ハンドボールに合ったプレーをしていて、インドハンドボールでは強豪と呼ばれる国を相手にうまく試合を運んでいました。これまでインドハンドボールを指導してきたコーチ陣がチームスタッフになっているため、これは仕方ないかもしれませんが、指導する側も車椅子ハンドボールの特性についてもっと理解を深め、それに合ったプレーや戦術を考えることが大事だと思いました。

- ・ テクニカルデレゲートも不慣れなため、女性プレーヤーが退場になった場合のポイントの扱いが間違っていたり、1セットで2回目のタイムアウトのブザーが鳴ってしまったり、予想外のことが多発しました。また、今日は2試合ともパキスタンレフェリーと組んでの試合でしたが、英語があまり上手でないことに加え、自分たちの国のやり方を押し付けてくる感じで、非常にやりにくかったです。これではペアとしてちゃんとしたレフェリングができないと思い、試合前に自分の思いを伝えましたが、2試合目は試合の結果に影響するミスジャッジをしてしまいました。これは、予想外のことが起きた際に、冷静な判断が下せなかったこと、ペアレフェリーが言っていることが理解できなかったこと(TDも理解できていませんでした)、それが不信感につながり、気持ちが安定した状態でレフェリングできなかったことなどが原因だと思います。試合後、とても落ち込みましたが、他のレフェリー仲間が励ましてくれたことで、気持ちを切り替えることができました。まだ出会って1週間も経っていませんが、家族のような存在の仲間たちに本当に助けられました。
- ・ 昼食後のミーティングで、ホテルでの食事の際に、私服や別のメーカーのウェアを着ていたメンバーがいたため、タボルスキー氏から「大会期間中は、スポンサー企業であるヒュンメルから支給されたものを常に身に付けること」と、ウェアについて注意がありました。

3日目：9月24日(土)

時間	内容
8:00～	観光(ピラミッド見学)
12:00～	昼食・準備
13:30～	会場へ移動
15:00～	ブラジル v チリ
17:00～	インド v スロベニア (リザーブ)
19:00～	オランダ v エジプト (ブラジル人レフェリーと担当)
20:00～	PCR 検査
21:00～	ホテルに帰着、夕食

- ・ 試合が午後からだったので、こちらに来てから初めて観光する時間が取れました。毎日朝から夜まで緊張した日々を過ごしていたので、ようやくリラックスした時間が過ごせました。
- ・ 今日は19時からオランダ v エジプトの試合を担当しました。ペアを組んだのは、IHFのウェビナーで講師も務めたブラジル人レフェリーでした。彼とはよくコミュニケーションが取れたので、昨日の反省を活かしつつ、安心して吹笛することができました。試合後に、車椅子同士の衝突を見逃していた場面があったことを指摘されました。インドハンドボールでも同じだと思いますが、トランジションの中での接触を見極めるのが今後の課題だと思いました。全体として内容は良かったので、昨日から気持ちを切り替えて、気持ちよく終わることができました。
- ・ 試合終了後に、オランダの選手と話しました。「初日から比べると、どんどんプレーが良くなっているね」「初日よりルールを理解してプレーをアジャストしているのも要因だけど、レフェリーたちも徐々に上手になっているからだね」と言われました。やはり初めての世界選手権ということで、選手もレフェリーも日々進歩しようという努力が表れた結果だと思いました。

4日目：9月25日(日)

時間	内容
10:50～	公式写真撮影
12:00～	昼食・準備
13:30～	会場へ移動
15:00～	5・6位決定戦 インド v オランダ (リザーブ)
17:00～	3位決定戦 チリ v スロベニア
19:00～	決勝 ブラジル v エジプト
20:30～	閉会式
22:00～	ホテルに帰着、夕食

- ・ 午前中はレフェリーシャツを着用しての写真撮影が行われました。それしか予定がなかったのですが、観光に出かける時間はありませんでした。
- ・ 最終日の順位決定戦は、非常に盛り上がりました。第3セットやゴールデンゴールにもつれ込む接戦が続きました。
- ・ 決勝戦が始まる前に、レフェリーとTDの最後のミーティングを行いました。タボルスキー氏、そして審判長のブレト氏から「君たちはここまで本当に良くやってくれた。初めての世界選手権で、最初はどうなるか心配だったが、君たちの立ち振る舞いが非常に良かった。君たちはIHFファミリーだ。これから各国の車椅子ハンドボールのアンバサダーとして活躍してくれることを期待する」とのコメントがあり、胸が熱くなりました。一人ひとりに、タボルスキー氏からIHFのピンバッジが手渡されました。
- ・ 決勝戦は地元・エジプト対ブラジルの試合だったので、会場の3分の1ほどが観客で埋まり、大きな盛り上がりを見せました。これぞ世界選手権という雰囲気を感じることができました。試合は第3セットでも決着がつかず、今大会初となるシュートアウト(7MTC)にもつれ込みました。レフェリーの立場として、どのようにシュートアウトを行うのか、実際に観ることができてよい勉強になりました。試合は、これまで4人制車椅子ハンドボールの基盤を作ってきたブラジルが接戦を制し、初代チャンピオンに輝きました。
- ・ 閉会式も非常に和やかな雰囲気で行われました。無事に大会が終了し、安堵感に包まれると同時に、この1週間のできた新しいハンドボールファミリーとの別れが名残惜しく感じました。

4. 総括

初めに、記念すべき第1回目の車椅子ハンドボールの世界選手権に参加させていただき、心から感謝いたします。大好きなハンドボールにおいて、「日本人で初めて」という経験をさせていただき、こんな光栄なことはありません。今後、私の経験を伝達することで、車椅子ハンドボール、そして日本のハンドボール全体の発展のために貢献していきたいと思えます。

初めての車椅子ハンドボールの世界大会ということで、レフェリーはもちろん、全てが初めてのことだったので、毎日が試行錯誤と学びの日々でした。ルールはもちろんですが、今後も今回のような世界大会を繰り返し開催することで、よりスムーズな競技運営とプレーが展開されることを期待します。

今回、私がノミネートされた理由は、レフェリーのスキルというよりも、「英語でコミュニケーションが取れる」という部分が大きいと思えます。各国からペアでノミネートするのではなく、個人単位でノミネートし、現地でペアを組む、という流れが今後加速する気がしています。そのため、高いコミュニケーションスキルがより求められるようになると思えます。

また、英語といっても、ハンドボールの世界大会に英語のネイティブスピーカーはほとんどいません。みんな独特のクセがある英語を話します。私は英語を教える仕事をしていますが、もしも私が、ネイティブの英語だけを聞いて英語を身に付けた人だったら、今大会でのコミュニケーションはとて難しかったと思えます。異なる文化を理解し、時にはジョークを交え、フレンドリーに接していくことが必要になります。様々な国の人が集まった世界選手権では、私のこれまでの国際交流経験が活かされたなあと思えました。

そして、英語に加えて、話せる言語を増やしていくことも考えなければならぬと思えました。例えば、ブラジル人は、ポルトガル人とポルトガル語で話すことができます。今回参加したフランス人TDは、両親がポルトガル人で、奥様がチェコ人のため、4か国語を操ります。オーストリア人のレフェリーは、セルビア出身で、クロアチア語と英語、ドイツ語を話します。ハンドボールはヨーロッパ発祥のスポーツのため、みんなが複数の言語を操るのがスタンダードになっています。私も、これからもっと様々な言語に触れて、コミュニケーションスキルの幅を広げていきたいと思えました。

最後になりますが、このような貴重な経験をするチャンスを与えてくださった日本車椅子ハンドボール連盟、私をノミネートしてくださったIHF、そして、快く送り出してくれた日本ハンドボール協会の関係各位の皆様、心からの感謝を申し上げます。

以上